

第 29 回 介護福祉士国家試験総評 ～第 30 回に向けて～ 福祉教育カレッジ

今回の第 29 回国家試験から、「実務経験ルート」（実務経験 3 年以上の経験のある受験者）から受験する場合には「実務者研修」の修了が必要となったことにより、受験者数が昨年の約 16 万人から 8 万人に半減した。全体の出題傾向として、過去に出題された内容の問題が多く出題されていることから、これらの内容を押さえて確実な知識を備えていれば、着実に合格ラインを突破することができたものと思われる。今回は「実務経験ルート」からは実務者研修の修了者が受験しているため、平均的な得点率は上昇することが予想されるが、一方で受験者数が半減したことから一定の介護福祉士取得者数を確保する必要もあると考えられることから、合格基準点は 74～75 点に収まるのではないかとと思われる。

●出題数について

今回から出題基準に「医療的ケア」が新たに 5 問追加され、全問で 125 問となった。また「介護の基本」や「生活支援技術」の科目の出題配分が変更になるなど、出題数が大幅に変更された。「生活支援技術」は介護の基本的技術の知識が問われる重要な科目のため、第 30 回以降も特に重点を置いた学習が必要となる。

今回、出題数が変更された各領域及び科目は、以下のとおりである。

領域/科目		第 29 回	第 28 回
介護	介護の基本	10 問	16 問
	生活支援技術	26 問	20 問
医療的ケア		5 問	

また、短文事例問題については、過去問題と同様に各科目に満遍なく出題されたが、出題数は第 27 回が 17 問、第 28 回が 23 問と増加傾向にあったが、今回の試験では 18 問と減少する傾向がみられた。

●各科目群の試験概要及び傾向

以下、合格基準に示されている 11 科目群の試験概要及び傾向等を示す。

1) 「人間の尊厳と自立」、「介護の基本」

「人間の尊厳と自立」から 2 問、「介護の基本」から 10 問、合計で 12 問出題された。短文事例問題は各科目から 1 問ずつ出題された。8 問以上の正答が欲しい科目群である。各科目ともに標準的な難易度の問題で構成されており、出題基準の各項目の基礎的な知識で解くことのできる問題が多かった。過去問などで確実に押さえておくことにより得点できた科目群である。

2) 「人間関係とコミュニケーション」、「コミュニケーション技術」

「人間関係とコミュニケーション」から 2 問、「コミュニケーション技術」から 8 問、合計で 10 問出題された。短文事例問題は各科目から 1 問ずつ出題され、また事例問題が「コミュニケーション技術」

平成 29 年 2 月 13 日

から 2 問出題された。7 問以上の正答が欲しい科目群である。各科目ともに標準的な難易度の問題で構成されており、問題文を冷静に読んでいけば基礎的な知識で解くことができる問題が多かった。特に障害のある人とのコミュニケーションに関する問題が複数出題されており、障害の種類や程度に応じたコミュニケーション技法を学習しておくことが重要である。

3) 「社会の理解」

「社会の理解」からは 12 問出題された。短文事例問題は 3 問出題された。例年の問題と同様に社会福祉・社会保障関連の制度に関する問題、保健医療に関する問題が多く出題されており、介護現場の専門職を目指す受験者にとっては若干苦手な領域になるが、最低 5 問以上の正答が欲しい科目である。社会保障、介護保険、障害者自立支援などの諸制度に関する基礎的な知識を身に付けていけば解くことができる問題が多いので、苦手意識を払拭して学習すれば得点できる科目である。

4) 「生活支援技術」

「生活支援技術」からは昨年の問題数から 6 問増えて 26 問になったことで、出題基準の大項目から満遍なく出題され、「生活支援」から 1 問、「身じたくの介護」「移動の介護」から各 5 問、「居住環境の整備」「排泄の介護」「家事の介護」から各 3 問、「食事の介護」「睡眠の介護」から各 2 問、「入浴・清潔保持の介護」「終末期の介護」から各 1 問出題された。また、短文事例問題は 4 問出題された。18 問以上の正答が欲しい科目であるが、基礎的な知識や一般常識で解くことのできる問題が多かったため、実務経験のある受験者にとっては点数が稼げた科目であろう。ただし、問題 42 は当初各社の見解が分かっていたが、実行機能障害では行動するための段取りが取れないため、今は何をしているのか、次の動作をどうすればよいかなど声かえや、きっかけとなる行動を手伝うことが望ましいため、弊社は4「隣で、洋服を着る動作を示す」を正解とした。

5) 介護過程

「介護過程」からは 8 問出題された。短文事例問題は 1 問出題され、また事例から 2 問出題された。5 問以上の正答が欲しい科目である。出題の傾向としては、近年の傾向通りに事例問題が 3 問出題されており、介護過程に関する基礎知識を踏まえて、利用者の状況に応じた介護過程について問う傾向が強くなっている。介護過程の基礎知識を身に付けたうえで、事例を通した総合的な学習を行うことが必要である。

6) 発達と老化の理解

「発達と老化の理解」からは 8 問出題された。短文事例問題は 1 問出題された。5 問以上の正答が欲しい科目である。過去問の頻出問題が多く出題されたので、過去問などで確実に押さえておくことにより得点できた科目である。

7) 認知症の理解

「認知症の理解」からは 10 問出題された。短文事例問題は 1 問出題された。6 問以上の正答が欲しい科目である。認知症の種類と特徴的な症状を理解しておかないと戸惑う問題が多かった。第 30 回以降、特に認知症の原因となる病気の症状の特徴や認知症と間違えられやすい症状（うつ病など）は理解しておく必要がある。

8) 障害の理解

「障害の理解」からは 10 問出題された。短文事例問題は 2 問出題された。7 問以上の正答が欲しい科目である。過去問題で出題傾向のある問題が出題されており、また法律や制度に関する問題がなかった点でも解きやすかった科目である。ただし、問題 87 については、当初 2 と 4 で各社見解が分かれていた。「環境因子」は物的な環境だけでなく、人的な環境、制度的な環境も含まれるため、弊社は選択肢の「電動車いす」、「仲の良い友人」ともに環境因子に分類されると判断し、2、4 とともに正解とした。ちなみに弊社の国試採点サービスでは約 7 割が 4 「仲の良い友人がいること」を選択していた。試験センターの発表が待たれる。

9) ころとからだのしくみ

「ころとからだのしくみ」からは 12 問出題された。短文事例問題は 1 問出題された。7 問以上の正答が欲しい科目である。出題基準の大項目から満遍なく出題されており、また、標準的な難易度の問題で構成されており、出題基準の各項目の基礎的な知識で解くことのできる問題が多かった。幅広い知識の習得が求められる科目であるので、苦手意識のある受験者も多いと思うが、過去問などで確実に押さえておくことにより得点できた科目である。

10) 医療的ケア

「医療的ケア」からは 5 問出題された。短文事例問題は 1 問、またイラストによる問題が 1 問出題された。3 問以上の正答が欲しい科目である。「医療的ケア」は今回の試験から新たに追加された科目であり、出題実績がないので過去問から出題傾向を絞ることができず、受験者にとっては不安を持って望んだのではないかとと思われるが、初回ということもあってか、5 問すべてが基礎知識を問う内容であった。第 30 回に向けて、まずは正確な基礎知識の習得が必要となる。

11) 総合問題

「総合問題」からは、事例問題で 4 事例、1 事例について 3 問、合計 12 問が出題された。6 問以上の正答が欲しい科目である。例年どおりに高齢者と若年者の各 2 人の事例で出題された。国家試験出題基準の全領域（「人間と社会」、「介護」、「ころとからだのしくみ」、「医療的ケア」）の知識や技術を総合的に問う科目であるため、確実な知識が求められた内容であった。